

かけがえない山、川、里。生命めぐる、我が美しきふるさと。
映像とエッセイでつづる、人と家と暮らしの物語。

志太平野



三 金谷・菊川流域

立ちつくせば、そこに
歴史が息づいている。

島田市 神谷城

編集人／杉村喜美雄（ハイホームス）
撮影／村山正良（M2WORKS）
文／岡本 國治（岡本戦略広告事務所）

神谷城では、列車は谷の下、菊川の流れを縫うように、走っています。

アクセルを踏み続けている限り、通り過ぎる村々は、あっという間に遠ざかる風景のひとつにすぎない。しかし、ひとたびクルマから降り立つと、どの村にも継がれてきた歴史がある。何ひとつ変わらないかみえて、時は少しずつ、やがて村独自の「しわ」を刻み……、自然と関わる暮らしは、幾多の伝説を生み、風習・文化が育まれ、それらのすべてが、村人の生きる術、心の拠り所になっている……。

山の中腹。木立の間から見え隠れする神谷城は、川と鉄道と道と、三つの動脈が走っているように見えます。雨が続くと地すべり、日照りが続くと水不足に悩まされてきた丘陵斜面には、いま、きれいに手入れされた茶畑や田んぼが、美しく続いています。そこかしこに点在する塚や地藏尊、祠、お堂、記念碑は、神谷城が長い歴史を大切に刻んできたしるしです。



列車は緑の中の里を走っていきます。
この辺りで、上下線が大きく分かります。

村に降りると、頭上には谷間とは思えないほど、広い空が明るく抜けています。ですが、およそ五五〇年前、室町時代の終わりから、武士の落人が住み始めたといわれるこの一帯は、長く「深谷」と呼ばれてきました。それだけ、木々の生い茂る深い谷であり、隠れ住むのに適していたのでしょうか。

榛原郡石神村と東深谷村がひとつになり、それぞれの

字をとって「神谷村」となったのが、明治七年（一八七四）三月。十三年後の明治二〇年には、城東郡西深谷村と合併し、城を加えて「神谷城村」となった……と、文献に記録されています。さらに、国の町村区域制定によって、金谷宿、河原町などととも、一宿一町三ヶ村が集まって金谷町となりました。これが明治二二年（一八八九）四月のことですから、神谷城が所属する「金谷町」は、二〇〇五年に島田市と合併するまで、一六六年続いたこととなります。

明治二二年四月の年月を同じくして、もうひとつ特筆すべきことが起こりました。鉄道の開通です。

測量が始まったのが、明治一九年九月。穂の出かかった稲を刈り取り、田を埋め立てて工事場や飯場がつくられたといえます。トンネル用のレンガ焼き場も、近くの松林を切り開いてつくられました。蒸気で走る鉄の乗り物、線路、トンネル。当時、聞くことすべてが驚きだったに違いありません。

維新からわずか二〇数年で鉄道が走るようになり、谷あいの村は、もう孤立した村ではなくなりました。線路の先にはたく

さんの駅がなくなり、駅は賑やかな街につながっています。神谷城は、列車の走る文明開化の進んだ村になりました……。



入口を夏草におおわれた明治のトンネル。現在は、すぐ右側にあるトンネルが、上り線専用に使われています。



光る線路に写る入道雲。

でも、これは、外部の者が実情を知らずに描く幻想。通り過ぎるだけの鉄道は、往來を東西に分断し、不便にただけ。村にとってこれが現実だったようです。

暮らしに影響を与えたのは、鉄道ばかりではありません。新しい産業が社会を変え、谷あいの村をも巻き込んでいく。時代はこれより大きく動いていきました。

明治から大正の日本は、繊維とお茶で外貨を稼ぐ時代。山谷村でも「養蚕」と「お茶」が盛んに行われるようになりました。昭和十年には、水神橋のたもとに「稚蚕共同飼育所」が建てられています。しかし、養蚕業は戦争とともに衰え、今日まで丹精を注がれてきたお茶も、ここへきて大きな変革期を迎えています……。

列車が走り続けて一六六年。鉄橋を渡る音、トンネルの前で鳴り響く汽笛。これらの音も風景も、この谷一帯の山、空、川、道、田、茶畑、家々―にとって、あるのが日常であり、すでに村の一部。「もし神谷城に鉄道が走っていないなかったら？」。こんな想像はとうに無意味になっているのかもしれない。これからは、クルマで通るにせよ列車にせよ、行き過ぎるひとつの村にも、数世代に継がれてきた誇るべき歴史や伝承、生活文化があることに思いを寄せていきたいと思えます。



新茶の芽吹きが美しい、田園風景。春の光に、水もぬるんでいます。



水神橋の左岸には、水神社と蚕神社が祀られています。近くにあった稚蚕共同飼育所は、昭和33年、神谷城保育園へ建て替えられました。





























